

第93回藤稲史談会

『源頼朝挙兵時の相模武士の動向』

日 時：令和4年3月25日（金）午後2時～4時

場 所：本庁舎5階第3会議室

発表者： 会員小池清志

＜本稿のねらい＞ 今まで日本史の通史が中心であり、郷土史を取り上げる機会が少なかった。今年のNHKの大河ドラマが「鎌倉殿の13人」なので、鎌倉幕府を開いた頼朝と相模武士を取り上げた。

1. 保元・平治の乱への相模武士の参戦

(1) 保元の乱(1156, 保元元年) 出典:保元物語

大庭平太景能(義)、同三郎景親、山内刑部丞(ぎょうぶのじょう)俊通・子息滝口俊綱、海老名源八季(すえ)貞、波多野小二郎義通

(2) 平治の乱(1159, 平治元年) 出典:平治物語

波多野二郎義通、三浦荒次郎義澄、山内首藤(すどう)刑部俊通・子息首藤(すどう)滝口俊綱

2. 頼朝挙兵時の相模武士

(1) 源氏方

- ① 土肥次郎実平 ② 同弥太郎遠平 ③ 土屋三郎宗遠 ④ 同次郎義清 ⑤ 同弥次郎忠光
- ⑥ 岡崎四郎義実(よしざね) ⑦ 真田与一義忠 ⑧ 大庭(懷島)平太景義(能) ⑨ 豊田五郎景俊
- ⑩ 中村太郎景平 ⑪ 同次郎盛平

(2) 平家方

- ① 大庭三郎景親 ② 俣野五郎景久 ③ 河村三郎義秀 ④ 糟谷(屋)権守盛久
 - ⑤ 海老名源三季貞 ⑥ 曾我太郎祐信(すけのぶ) ⑦ 山内首藤滝口三郎経俊
 - ⑧ 毛利太郎景行 ⑨ 長尾新五為宗 同新六定景
- (源氏に内応した武士:梶原平三景時、飯田五郎家義)

(3) 石橋山の合戦に間に合わなかった三浦一族(源氏方)

- ① 三浦荒次郎義澄 ② 佐原十郎義連 ③ 大多和三郎義久 ④ 同義成 ⑤ 和田太郎義盛
- ⑥ 和田次郎義茂(よしもち) ⑦ 多々良三郎重春 ⑧ 筑井(つくい)次郎義行 ⑨ 長江太郎義景

3. 頼朝挙兵の経過

治承4年(1180)5月 源三位頼政、以仁王を奉じて平家打倒の兵を挙げ、山城国宇治で敗死。

6月19日 三善康信からの手紙が頼朝に届く。全国で源氏狩りが始まったので逃げるように。

6月24日 頼朝「討たれるよりは討とう」と決意し、源氏譜代の御家人の許へ安達盛長を遣わす。

6月27日 京からの帰途、三浦荒次郎義澄・千葉六郎胤頼が伊豆・蛭が小島の頼朝邸に寄る。

8月2日 大庭三郎景親など相模武士が京から帰宅。

8月9日 大庭景親が、渋谷重国の食客(居候)をしている*佐々木秀義に向かって、「お前の息子四兄弟が頼朝邸に出入りし謀反を企てているようなので、直ちに止めるように」という。

*佐々木秀義…平治の乱で源義朝に従い近江の領地を平家に没収され、東国へ下って来ていた。

8月12日 来る16日に伊豆国*目代山木(平)兼隆を討つことを決定。

*目代…伊豆国の守は以仁王の乱までは源頼政の知行国だったが、それ以後平時国の知行国になっていた。山木兼隆はその代官。

8月17日 この日は伊豆国一之宮・三島神社の例大祭の日。未の刻(午後2時頃)佐々木定綱、経高、盛綱、高綱ら佐々木四兄弟参上、頼朝はその姿を見て感涙。戌の刻(午後8時頃)兼隆の*雑色を頼朝邸の台所で捕まえる。頼朝直ちに出击命令を下す。その時、兼隆を討ち取ったらその合図に屋敷に火をつけるよう命令。 *雑色(ぞうしき)…身分の低い雑用人源氏方は二手に分かれた。佐々木兄弟は兼隆の家老役・堤信遠邸を襲い、残りの約50人は山木邸を襲った。兼隆の家来の多くは、三島神社の祭礼に行つてその後も夜の遊びで山木邸へは帰って来なかったので手薄状態だった。

さて、頼朝は軍勢を送りだした後、なかなか火の手が上がらないので、加藤次景廉(かげかど)らと呼ばひ、「すぐに山木攻めの加勢に行くように」といって長刀(なぎなた)を渡し、兼隆の首を取ってくるよう命じた。彼らは馬にも乗らず走って行つた。それから数刻ののち山木邸から火の手が上がった。

8月20日 三浦一族が海路参上の筈が来ないので、頼朝は伊豆国を出て相模国土肥郷(真鶴・湯河原)へ向かった。付き従つたのは以下の武士である。(吾妻鏡には46人列記)

8月22日 三浦一族の精兵は海が荒れたため、頼朝軍に合流すべく、陸路から石橋山に向かう。

8月23日朝 頼朝は、北条氏、安達氏、工藤氏、土肥氏らの300騎を率いて石橋山に布陣した。

それに対し平家方は大庭三郎景親を総大将に、俣野氏、河村氏、渋谷氏、糟谷氏、海老名氏、曾我氏、山内首藤氏、長尾氏ら3000余騎が、源氏の陣営と谷一つ隔てて陣を張った。大庭景親の兵の中で飯田五郎家義は、志を頼朝に寄せていたので、馳せ参じようとしていたが、景親の軍勢が道に列(つらな)っていたために、心ならずも景親の陣にいた。

また伊藤祐親法師は300余騎を率いて、頼朝の陣の背後の山を宿とし、頼朝を襲おうとしていた。三浦の者たちは夜になったので、丸子川(酒匂川)のあたりを宿とし、郎従たちを遣わして、景親の家屋を焼失させた。その煙は空半分を覆うほど立ち上がり、これを見た景親は、三浦の者たちの仕業だと知るにいたった。

そこで景親らは話し合い「今日はすでに黄昏時になろうとしているが、合戦を行うべきである。明日になれば、三浦の者どもが(頼朝方に)加わり、おそらく破るのは難しいだろう」と軍議した。そこで数千の強兵が頼朝の陣に襲い掛かった。

平家の先鋒は大庭景親の弟俣野五郎景久であった。源氏方の先鋒は佐奈田(真田)与一義忠であった。日は暮れて辺りは暗くなっていた。その上また雨が降り出してきた。「あっ、あれは景久らしいぞ」与一義忠はさかんに刀を振るっている一人の武士を見つけ、てそうさけんだ。馬と馬とをぶっつけて馬の上で取っ組み合った。二人は馬から落ちて、雨でどろどろになった土の上を、上になったり下になったりして、力のある限りもみあった。そこに平家方の二人の武士がやって来た。それは長尾新五景宗、新六定景兄弟であった。新五は「景久は今上か下か」と声をかけた。

すると「上になっているのが景久だ」と与一はさけんだ(本当は与一が上)。「違う、違う上になっているのが与一だぞ」。与一は景久の首を取ろうと腰刀をいくら抜こうとしても抜けない。前に数人の武士を斬ってきた。その血のりがついて刀が抜けなかった。そこへ新五・新六兄弟がかけつけてきて、与一義忠の首を取ってしまった。景親はいよいよ勝に乗じた。

8月 24 日 明け方になって(頼朝は)杉山の中にお逃げになった。その時分は疾風に心を悩ませ、暴雨に身を震わせた。景親が頼朝を追って矢を放ったところ、飯田五郎家義は景親の軍に加わっていたのだが、頼朝を逃がすため、自分の家来のうち六人を景親の軍と戦わせ、その隙に(頼朝は)杉山(梶山)にお入りになったという。

* 武衛(頼朝)は杉山の内の堀口あたりに陣を構えられた。大庭三郎景親は三千余騎を率いて再び迫って来た。頼朝は後方の峰に逃れられた。この間に、加藤次景廉と大見平次実正が頼朝の後にとどまり、景親の軍勢を防いだ。この他にも加藤太光員、* 佐々木四郎高綱、天野藤内遠景、堀藤次親家らが馬を並べて防戦した。頼朝は馬を廻らして百発百中の技を見せながら何度も戦いに及び、その矢は外れることがなく、多くの者を射殺した。

* 武衛…「兵衛」の唐名。頼朝は右兵衛佐(うひょうえのすけ)であった。

* 佐々木高綱…宇治川の合戦で名馬「生月」に乗り、梶原源太景季と先陣争いを演じた。

北条殿父子三名(時政・宗時・義時)は景親らと闘われたため、次第に疲労困憊し、(頼朝と)離れ離れになった。光員、景廉、親家らは険しい道をよじ登ったところ、頼朝は倒れた木の上にお立ちになって、(土肥)実平がその傍らにひかえていた。頼朝は彼らの到着をお喜びになった。

実平が言った。「おのおの無事に参上したのは喜ばしいことではありますが、これだけの人数を引率されては、この山に隠れるのはきっと難しいでしょう。御身(頼朝のこと)だけは、たとえどんなに時間がかかっても、実平が計略をめぐらして隠し通しましょう」と言った。しかし彼らはお供したいと申し上げた。また実平は次のように言った。「今の別離は後の大幸のためです。共に生きながらえて、別の計略をめぐらしたならば、会稽の恥を雪いで復讐を果たすことができるでしょう」と。これによって各自が分散した。

その後飯田五郎家義が頼朝の後を追って参上した。頼朝の御念珠を持参したのだ。これは今朝の合戦で道に落としたものである。いつもお持ちになっていたのも、狩場の辺りで相模国の多くの武士が拝見していたのも、家義にも頼朝の物だと分かったのである。

そこで家義が御供をしたいと言うと、実平が先ほどの理由でこれを諫めたので、家義は泣きながら立ち去った。

北条四郎義時の兄三郎宗時は土肥山を下り、平井郷を通っていたところ、早川のあたりで、伊東祐親の軍勢に囲まれ、平井の名主紀六久重によって射取られた。狩野茂光(伊豆国の在庁官人、工藤・伊東等狩野一族の長で「介」を名乗る)は歩くことができなくなり自害した。

大庭景親は頼朝の跡を追って峰や谷を探しまわった。その一族に梶原平三景時という者がいた。彼は土肥の杉山のある洞窟中か老木のうろに頼朝たちを発見したが、わざとそれを見逃し、「ここは蜘蛛の巣だらけで人はいないぞ！ 他を探せえ〜！！」と叫んで

峰を上がって行った。それが「能」の*七騎落ちの場面として有名である。(絵は前田青邨)

*七騎とは…頼朝、土肥実平、安達盛長、岡崎義実、土屋宗遠、田代信綱、新開忠氏

8月25日 武衛(頼朝)が箱根にいらっしゃる間に、箱根山別当行実の弟良暹(りょうせん)は山木兼隆の祈祷師だったので、行実に背いて頼朝を襲おうとした。それを聞き付けた行実は「良暹はたいしたことはないが、景親が聞き付けてきつと攻めてくるでしょうから、早くお逃げなさい」と言って山の案内人を付けてくれたので、頼朝・実平らは箱根路を経て土肥郷へ向かわれた。

8月27日 辰の刻(午前8時頃)89歳の三浦大介(おおすけ)義明が三浦郡衣笠城で戦死した。

8月28日 武衛は土肥の真鶴半島、岩の港から船に乗り安房の国へ向かわれた。

8月29日 武衛は土肥実平を連れて船を勧め、安房国*平北郡の狹島に到着。北条殿(時政)をはじめめとする人々がお迎え申し上げた。

*下線部…現、鋸南町竜島のこと



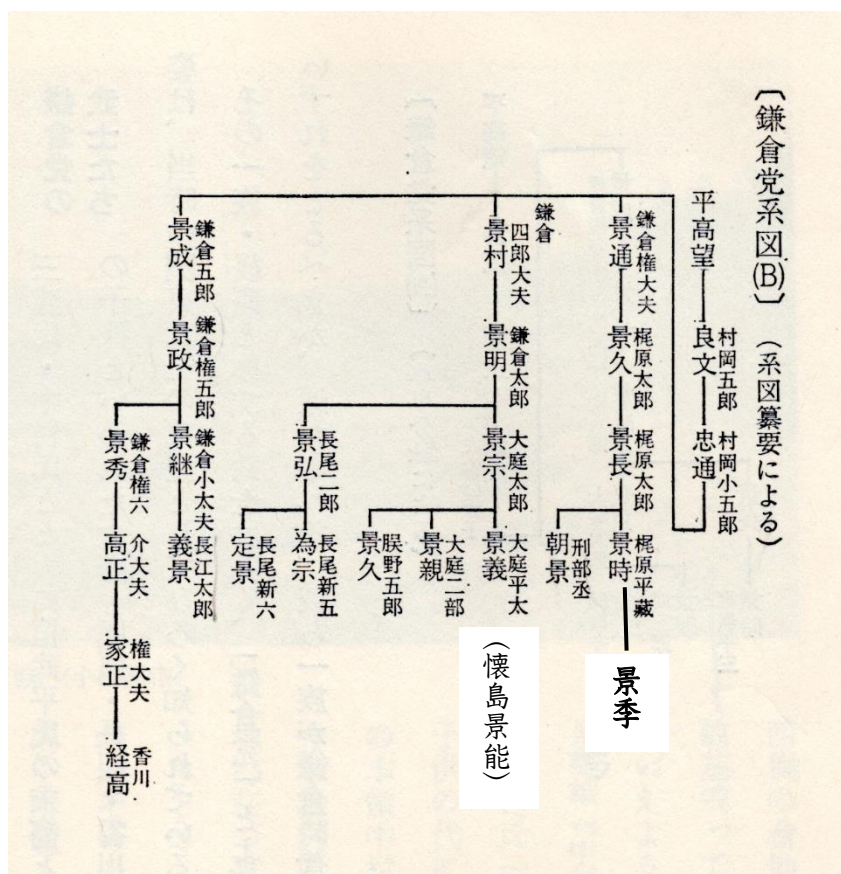
4. 鎌倉党(大庭一族)



源氏方

平家方

一方弟の景親は大庭城を根城に、関東の平家方総大将として、相模国銚子の在庁官人である中村氏・土肥氏、三浦氏等と対立関係にあった。なお景親の大庭城は、2021年(令和3)12



月1日に「**藤沢市指定史跡**」となった大庭城跡が「新編相模国風土記稿」では、大庭三郎景親が築いた城跡と記しているが、最近の発掘研究では全く違って来て、室町時代中期の扇が谷上杉氏（朝昌）の居城跡とされた。

景親の居館は城南3丁目の明治小学校から城(たて)神明社の辺りと推定されています。ここら辺の集落名の「たて」は漢字の「館」から来たものと思われます。またこの辺りは別名「隠れ里」ともいわれています。

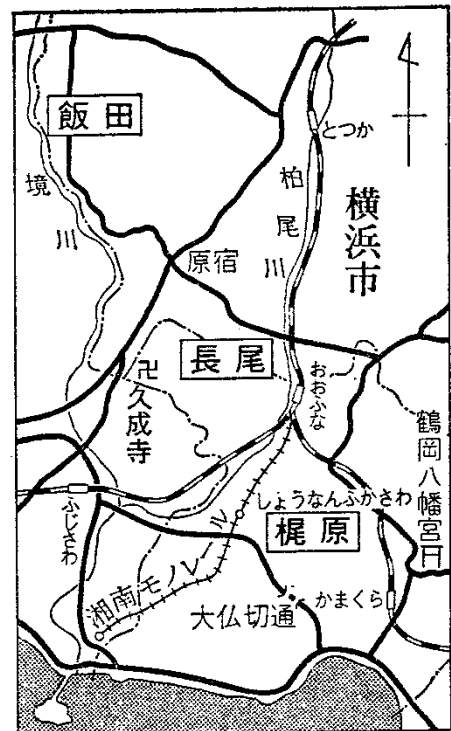
◎大庭平太景義(懷島景能)は最初から源氏頼朝方に、
ついた。

治承4年(1180)
10月7日頼朝が
鎌倉に入ると、
景能は頼朝邸の
建設奉行に選ば
れた。
景能邸は旧小出
川跡の自然堤防
上(標高5~6m)
に立地している。



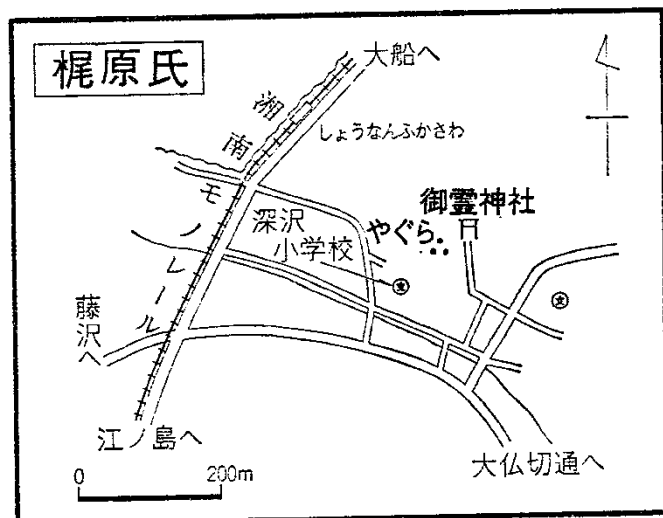
梶原氏・長尾氏・飯田氏らの本貫地地図

飯田五郎家義の本貫地は現横浜市泉区の上飯田・下飯田に該当する。飯田五郎は源氏に与力するため石橋山へと向かった。

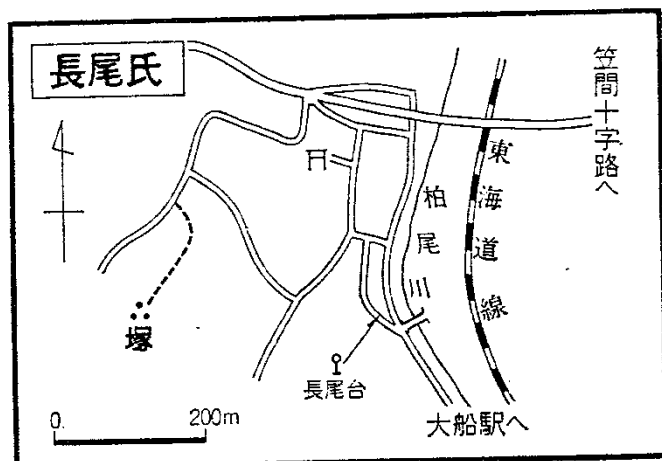


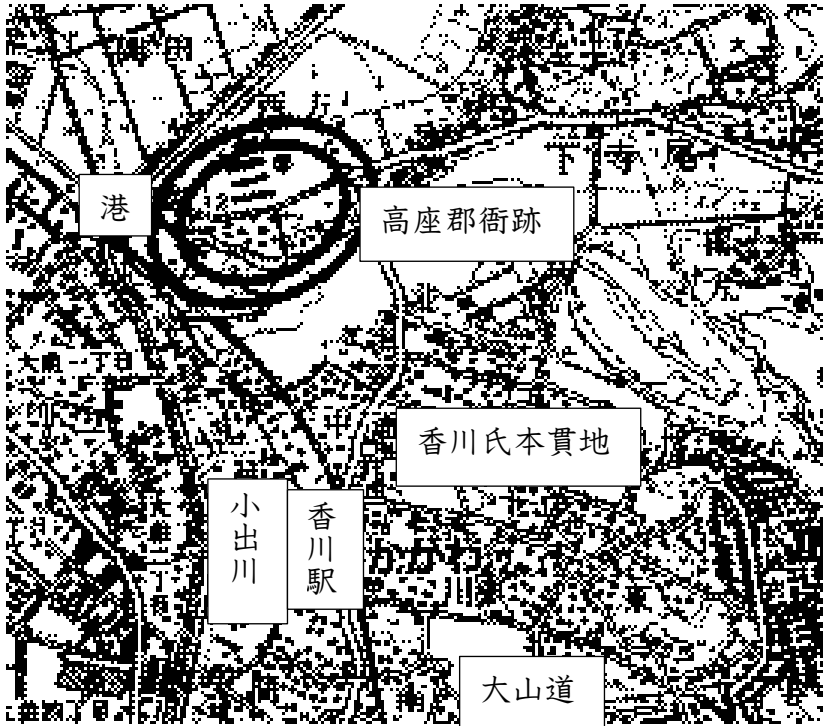
梶原やぐらは深沢小学校の一角にあり、同校の了解をえないと、中に入れない。伝景時の五輪塔等がある。

▲戸塚駅下車、戸塚バスセンターから湘南台行バス利用



◎上杉謙信の先祖は長尾氏。謙信の父親は長尾為景といい越後守護代。謙信は法号で、俗名は景虎、永禄4年関東管領「上杉」氏の名跡を継ぐ。頼朝挙兵時は平家方であった。上り方面大船駅を出て、左手が長尾台。





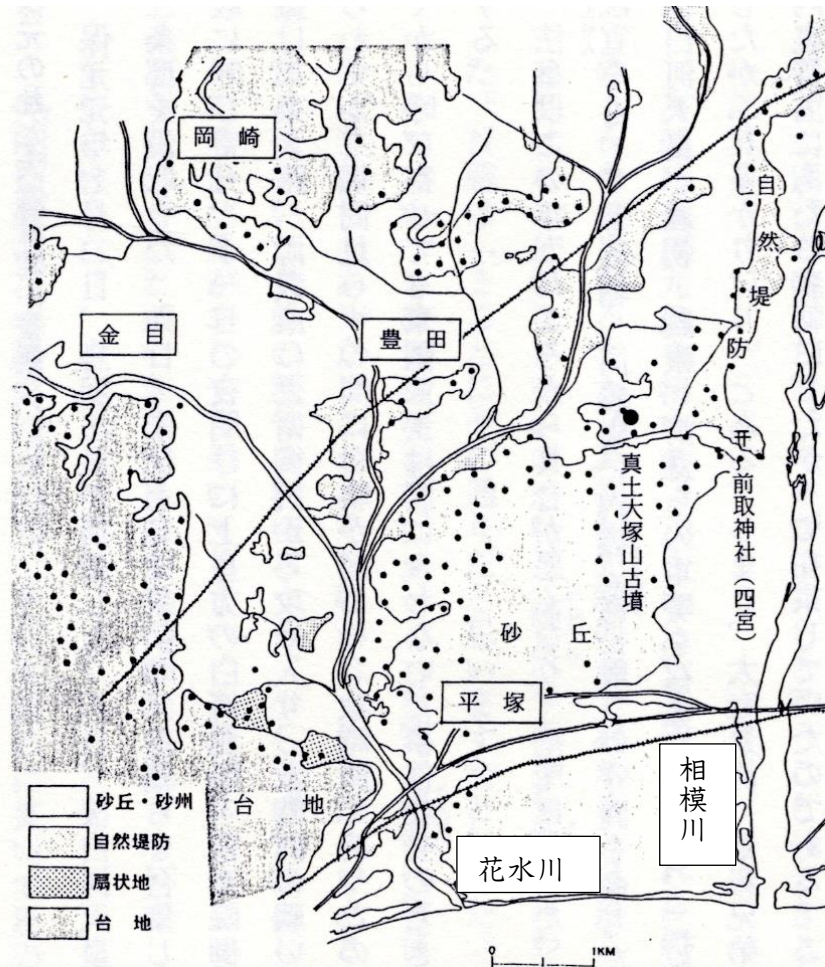
◎ 香川経高

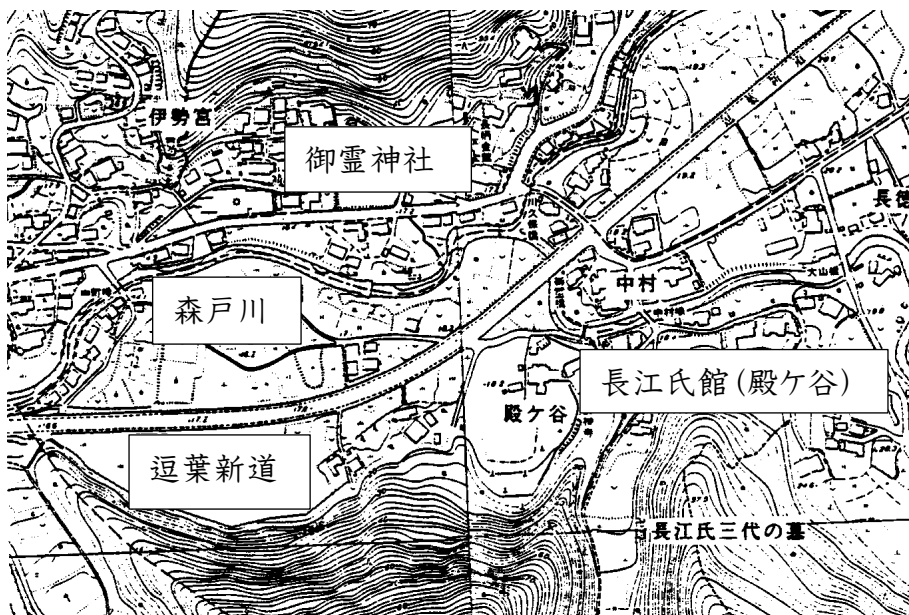
大庭一族、頼朝挙兵時、平家方。藤沢市四ツ谷で東海道から分岐した大山道は茅ヶ崎市香川を通り、寒川町から相模川を渡り、平塚市田村へ入る。

香川駅は JR 相模線で茅ヶ崎から二つ目の駅である。この辺りが香川氏の本貫地である。二重丸に囲まれた部分が古代たかくら(高座)郡衙跡(下寺尾官衙遺跡)であることが近年の発掘で明らかになった。ここは県立茅ヶ崎北陵高校を中心とした場所である。台地のすぐ下を流れる小出川の湾曲する部分には港があり、相模湾から船で相模川経由で遡上できた。

◎ 豊田五郎景俊

大庭一族。頼朝挙兵時源氏方。兄達は大庭景能、大庭景親、俣野景久の四兄弟。本貫地は大住郡豊田本郷(平塚市)。四兄弟の父景宗の墓も豊田郷にある。豊田郷は花水川の支流にあり東部に渋田川、西部に鈴川が流れている。近くには三浦氏系の岡崎四郎義実の本貫地岡崎や真田与一義忠の領地真田がある。また国府本郷(相模国府)のある大磯にも近い。

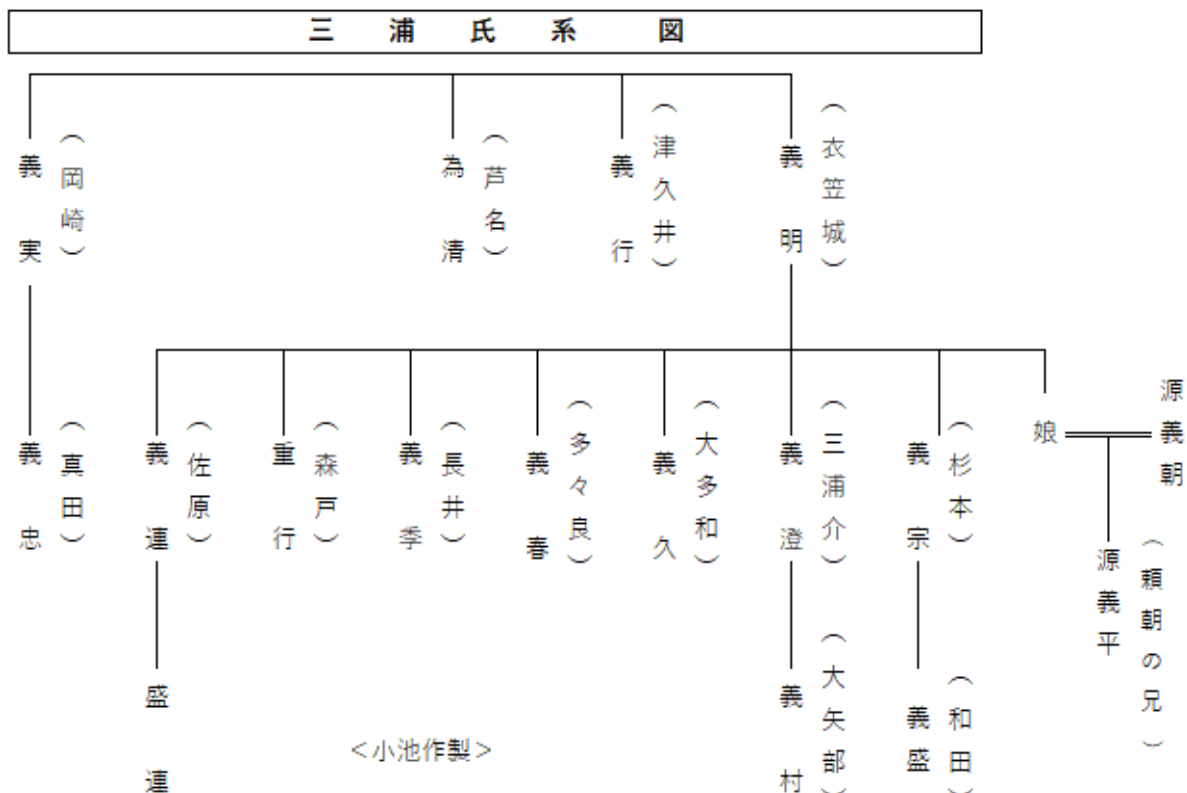




◎長江義景

石橋山の合戦の時、義景は鎌倉党でありながら、三浦党と衣笠城にこもり、平家軍と戦った。養和2年(1182)、義景は神宝奉行として、頼朝の願書を伊勢神宮に奉納した。そのとき義景は、伊勢神宮と関係の深い鎌倉権五郎景正(政)の「三代の孫」として、使者に選ばれている。それを系図として表すと、景正――景継――義景となる。

5. 三浦一族

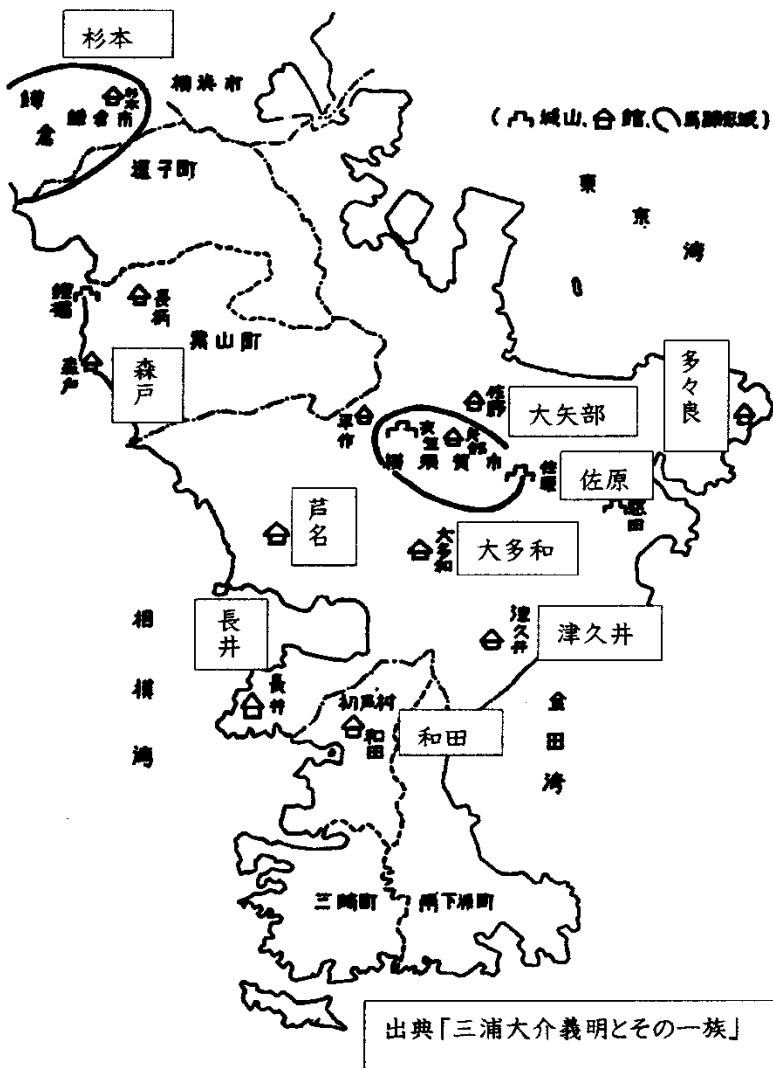


三浦市三崎の海南神社の伝承によれば、頼朝の旗揚げを聞いた一族の長老三浦義明は、ここで白い鶏と赤い鶏を闘わせ神意を聞いた処、白鶏が勝ったので一族をまとめて源氏側に加担したという。

◎武士社会の棟梁としての資格

治承4年6月安達藤九郎盛長が頼朝挙兵の御教書を持って三浦義明を訪ねた時、彼は「齢89のわれ、源家累代の家人として、幸いにも貴種再興のときに逢うなり」と言って涙を流した。つまり棟梁には貴種が条件で、皇室を先祖に持つ武士、即ち源氏とか平家がその資格を有していた。

◎三浦半島における三浦一族分布図…8頁の系図と併せて参照の事



海のものふ三浦氏

石橋山の合戦の時、三浦一族は船で相模灘を渡ろうとした。しかし大時化となり、急きよ船でなく陸路を行った、そのため石橋山の合戦に間に合わなくなってしまった。

また長寛元年(1163)安房国長狭郡(のちの日蓮生誕地)の長狭氏を攻めた時、海上から敵前上陸した際、大介義明の長男杉本義宗は、待ち伏せた敵のため戦死している。

(義宗は若死にしたため、一族の惣領の地位は義明から義澄へと継承された。)

また古代末期の相模国府は大磯に置かれ、その水駅は国府津であったとされるが、三浦氏は在庁官人として水駅の管理にも当たっていたと推定される。

◎三浦大介義明

生没年(1092年~1180年)

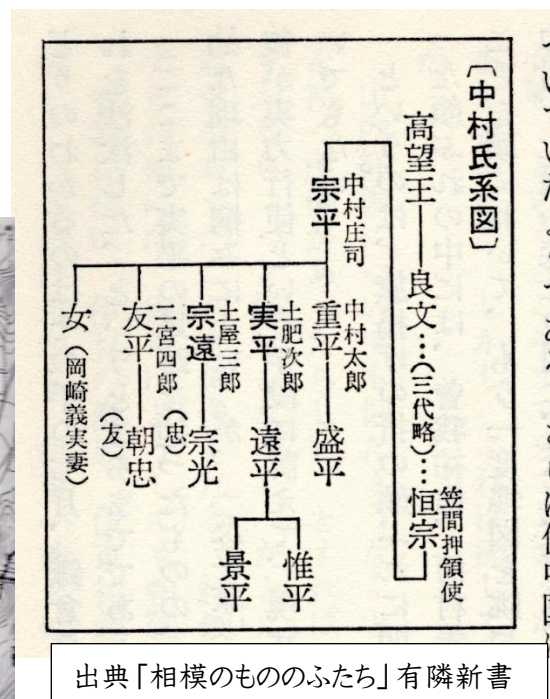
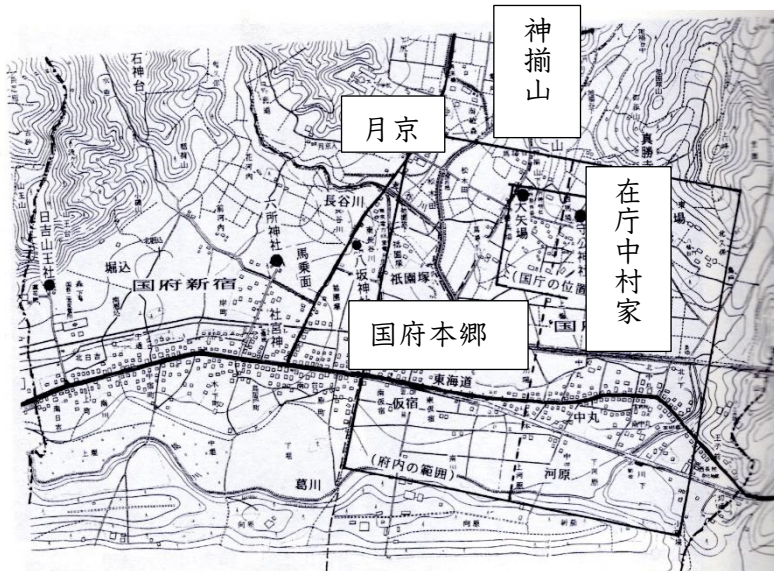
天養元年(1144)頼朝の父義朝が大庭御厨に乱入したさい、義朝の従者の中に義明の名前がある。治承4年源頼朝の挙兵に子の義澄らを派遣したが、石橋山の合戦後、由比が浜で平家側の畠山重忠と小競り合いを起こした。それがきっかけとなり、重忠は武蔵武士の大軍を率いて衣笠城にせめて来た。義明は一族を逃がし、城を枕に討ち死にした。



三浦大介義明像(材木座来迎寺)

6. 中村党

中村氏は中村庄司といわれ、中村庄(中井町)を支配し有力在庁官人として相模国府(大磯町)に大きな影響力を持ったようである。また源義朝の大庭御厨侵入事件(1144年)にも、三浦義明らとともに義朝の従者として参加している。



中村一族の中で何と言っても頼朝挙兵時に一番活躍したのは、土肥郷(現湯河原町)の土肥(どい)実平である。石橋山の合戦に敗れた頼朝の命の危機を救ったのは彼であった。

8月24日～28日箱根から土肥の山を逃げ回り、真鶴半島岩の漁港から無事頼朝を安房国に逃したのである。杉山を出て土肥の真鶴に向かう途中高台から見たのは、伊東祐親によって火をかけられた実平の館だった。それを見て踊ったのが「焼亡(じょうもう)の舞」である。また都人から平家追討に一

番功が有ったのは土肥実平だという評価だった。備後(広島県)の戦国大名小早川隆景の先祖は遠平である。

7. 波多野党

波多野氏の先祖は、大伴氏の配下で大和王権の国家統一に活躍した、古代軍事貴族の佐伯氏である。11世紀中頃の「前九年合戦」には、源頼義に従い活躍しそれ以降源氏の家人となった。その伝統的家柄から都の中下級貴族とも婚姻関係を持ち、滝口の武士や北面の武士も勤め、京文化も摂取した上級武士であった。また、前九年合戦当時の佐伯経範は、平将門乱の鎮圧者藤原秀郷の五代の孫公光の娘を妻にしたことから、藤原氏を名乗る系図も有るがそれは適切とは言い難い。佐伯氏系図によれば、*1.経資―2.経範―*3.経秀―○―遠義―義通―義常(松田氏)とつながる。

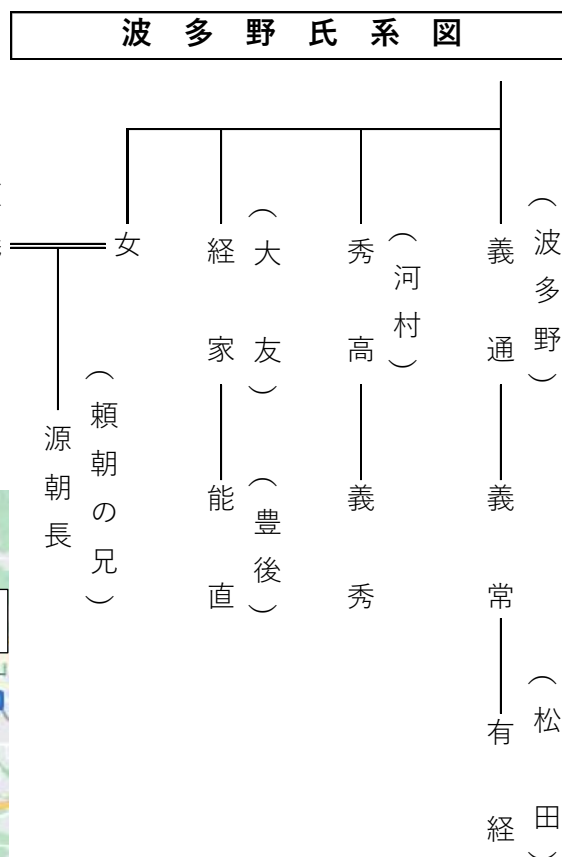
- *1. 経資(つねすけ)は平忠常の乱のさい、源頼信・頼義の指揮下にあり、源氏との関係を結ぶ。相模国目代となり相模国に土着。
- *2. 経範は前九年合戦で活躍(黄海の戦いで奮戦し、源頼義・義家父子を助ける)。秦野盆地の開発を図り荘園化を進める。
- *3. 経秀は後三年合戦で源義家に従軍。荘園を摂関家に寄進し、自分は波多野庄(荘)庄司となって、波多野氏を名乗る。

◎波多野武士団系図と分布図

波多野義通は保元の乱・平治の乱に源義朝の郎等として参戦。義通の妹は義朝の妻となり、一子朝長をもうけている。朝長は義朝の次男で、頼朝の兄にあたるが、平治の乱で深手をかい、父義朝によって殺された。

嫡子の波多野(松田)義常は頼朝の挙兵に参加せず、中立を保とうとしたが、頼朝の軍勢に攻められ戦わずして自害した。

◎戦国時代のキリシタン大名大友宗麟(ザビエルを保護)の祖先は大友能直(よしなお)である。



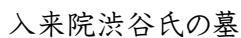
日露戦争の日本海海戦の名提督、東郷平八郎元帥の祖先は渋谷氏である。頼朝が旗揚げした頃の渋谷氏の当主は重国で彼は平家方として参戦した。しかし、彼の家に居候していた佐々木秀義と四人の子ども達はそろって頼朝方につき活躍した。

石橋山の合戦直後に勝った側の大庭景親が渋谷邸にやって来て、佐々木四兄弟の妻たちを人質にとると言った時重国は「私はあんたの為に戦ったんだ、そんなことはさせない」と言って追い払った。

鎌倉へ入った頼朝は、佐々木親子を20年近く面倒を見た重国を許し、御家人に加えた。

1247年の*宝治合戦では渋谷氏は幕府方として戦功をあげ、薩摩国入来院に領地を得た。その子孫からでたのが東郷元帥である。

*宝治合戦…三浦氏惣領家が滅んだ戦い。



◎渋谷荘々域
西端:綾瀬西高校→厚木基地→
大和市→高座渋谷:東端

山門院 (出水市) 和泉郡

莫欄院 (阿久根市)

東郷別符

高城郡 波谷重貞 (高城氏)

宮里郷

薩摩郡 島津氏

市来院 (市置市)

満家院

浦生院 (始良市)

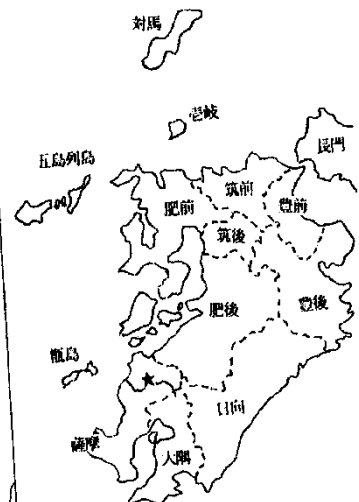
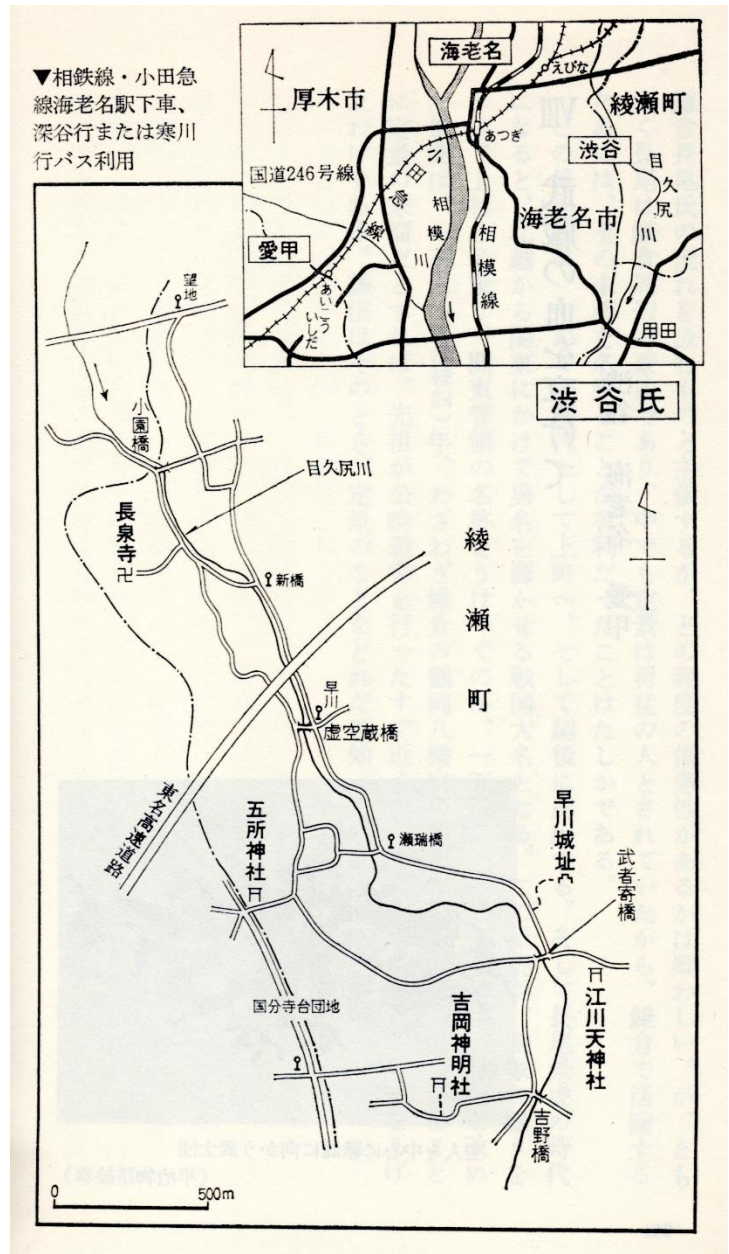
吉田院

波谷重諸 (鶴田氏) 祁答院 (鶴田)

波谷重実 (東郷氏)

波谷重保 (祁答院氏)

波谷定心 (入来院氏)



星印(左)図14 宝

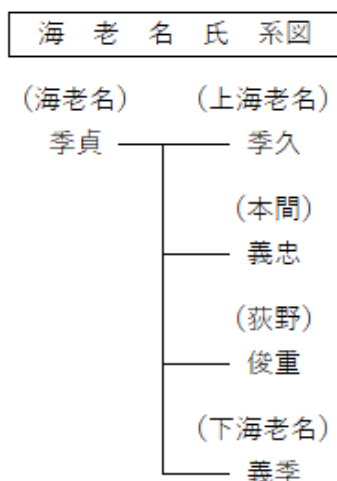
9. 海老名氏

海老名氏は、武蔵七党のうち＊横山党からわかれて相模国に南下し、その土地の地名を苗字とした。

* 横山党…小野篁(たかむら)の子孫で、南多摩郡横山荘(八王子市)を拠点にしていた。

頼朝が挙兵した頃の海老名氏の当主は季貞(すえさだ)で、はじめ平家方についたがまもなく降伏、その後木曾義仲攻め、平家攻めに従軍している。

日蓮が龍ノ口法難のあと佐渡に流刑されるさい、途中越智郷(厚木市)で佐渡守護代本間重連の館に滞在したが、その本間氏も海老名氏の一族である。



◎横山党、愛甲三郎季隆
本貫地：厚木・愛甲荘
頼朝挙兵時の動向不明
弓の名手、頼朝の子頼家の
弓の師範。



図1 海老名党の一族分布図 枠内の地名が本貫地である

10. 糟屋(谷)氏

糟屋(粕屋)氏は11世紀中頃伊勢原地域を開拓し、都の鳥羽上皇が鳥羽離宮に開いた安楽寿院にその土地を寄進した。頼朝が挙兵した頃の当主は盛久といい、はじめ平家方についたが、その子有季は御家人に取り立てられ、木曾源氏が滅んだあとの、平家との西海合戦では、源氏方として活躍している。

◎石田為久は大住郡石田庄司であったが、源平合戦には途中から参戦し、特に元暦元年(1184)年1月義経軍と木曾義仲との都をめぐる争奪戦で、石田為久は木曾義仲を射殺して名をあげた。



11. 山内首藤氏

保元・平治の乱、両方とも参戦した相模武士は波多野氏と山内首藤氏だけである。この両氏は頼朝挙兵のさい、いずれも平家方にぞくしている。それだけ両度の合戦で被ったダメージが大きかった証拠である。

山内首藤氏では平治の合戦で、山内経俊の父刑部丞俊通、経俊の兄滝口俊綱を失っている。

山内氏の家柄は、下野押領使藤原秀郷系藤原氏と都の摂関家藤原忠平系藤原氏が婚姻関係で結ばれた貴族的武士の家柄である。そのため中央官庁の刑部丞という官職を保持した上級武士である。

山内氏の本貫地は鎌倉郡内の山内荘である。その名は横須賀線北鎌倉駅周辺の字名として今日残っている。しかしそれは山内荘から見れば南端で、その中心地は根岸線本郷台駅周辺が「山内本郷」(栄区)といわれる。山内荘の北端は東戸塚駅北方までのびていた。源平争乱頃の山内氏の系図は俊通――俊綱――経俊
頼朝は治承4年(1180)10月7日鎌倉へ入ると

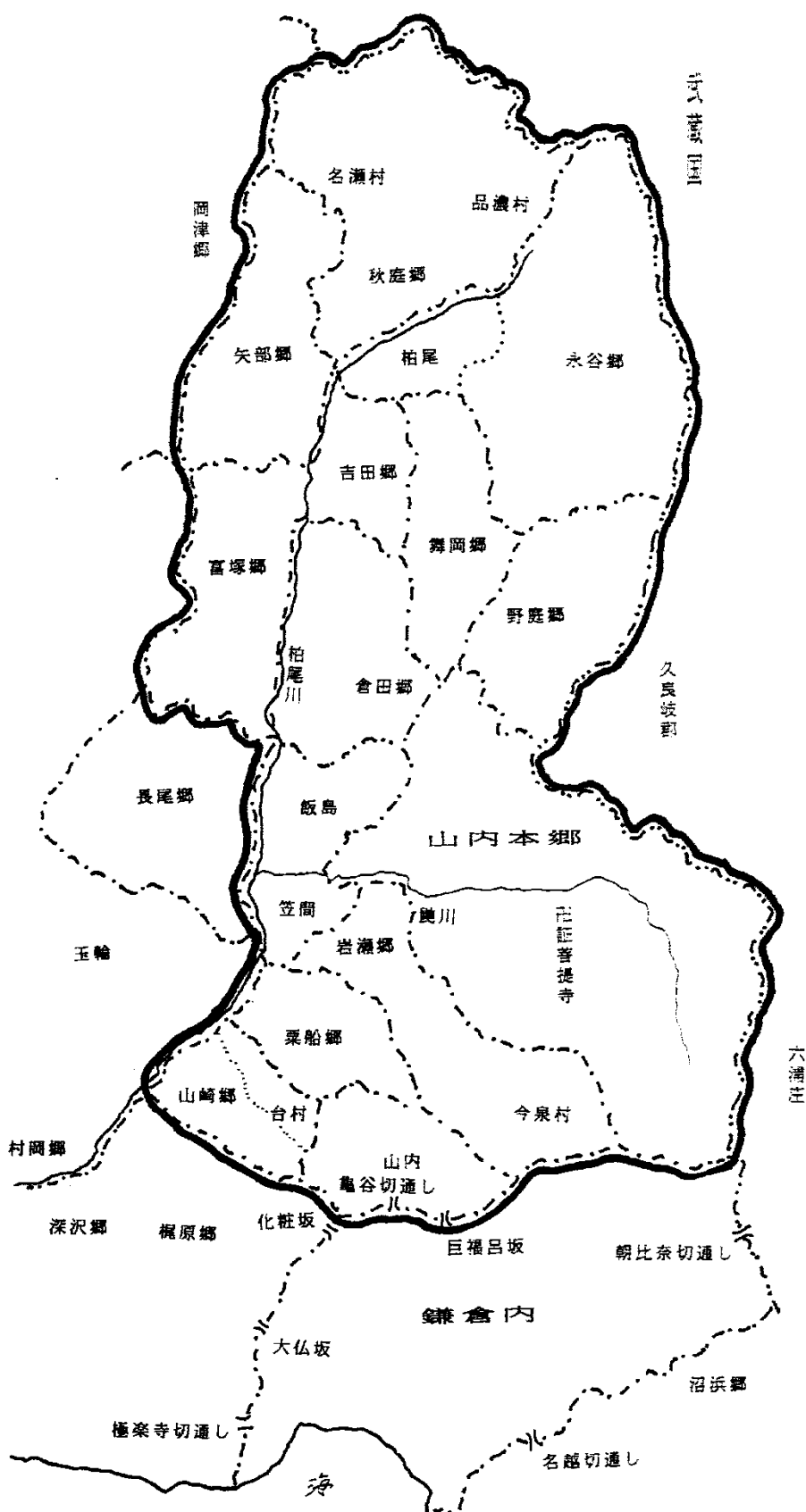


図8 相模国山内庄の概念図

石橋山合戦で平家方についた経俊に死罪を命じた。これに驚いた経俊の母はかつて頼朝の乳母であった関係から、命乞いに頼朝を訪ねた。「経俊が大庭景親に与した罪はまぬがれないが、石橋山の合戦で、平家方であった者も多く許されている。特に俊通と俊綱は平治の合戦で討ち死にした。先祖以来の源家への忠節の功によって許してほしい」と訴えた。

これを聞いた頼朝は無言のままに、経俊の母に鎧を入れた唐櫃を開いて見せた。石橋山の合戦で経俊の射った矢が、頼朝の鎧の袖に当たり、その矢の口巻き(やじりまき)に「滝口三郎藤原経俊」と書いてあるのを見せたのである。これを見た母は言葉も無く退出した。

しかしその後、頼朝は経俊を許し御家人に加えたが、山内荘は没収され將軍領荘園(関東御領)となった。

12. 曾我祐信

彼は頼朝の挙兵時平家方であったが、まもなく投降して捕虜になり、11月赦免されて頼朝に臣従した。元暦元年(1184)2月一ノ谷の戦いで、源範頼の配下で戦った。

また、仇討で有名な曾我兄弟の義父である。

工藤祐経は父が若死したのに少年だったので、後見人に伊東祐親になった。成人した祐経は祐親に、領地返却を迫ったが、取られてしまった。怒った祐経は伊東祐親親子が狩に来たのを待ち伏せして、祐親を射殺そうとしたが、誤って息子の河津祐泰を殺してしまった。妻の満江御前は十郎・五郎を連れて、曾我祐信と再婚した。連れ子は曾我の養子となり、祐成・時致と名乗った。

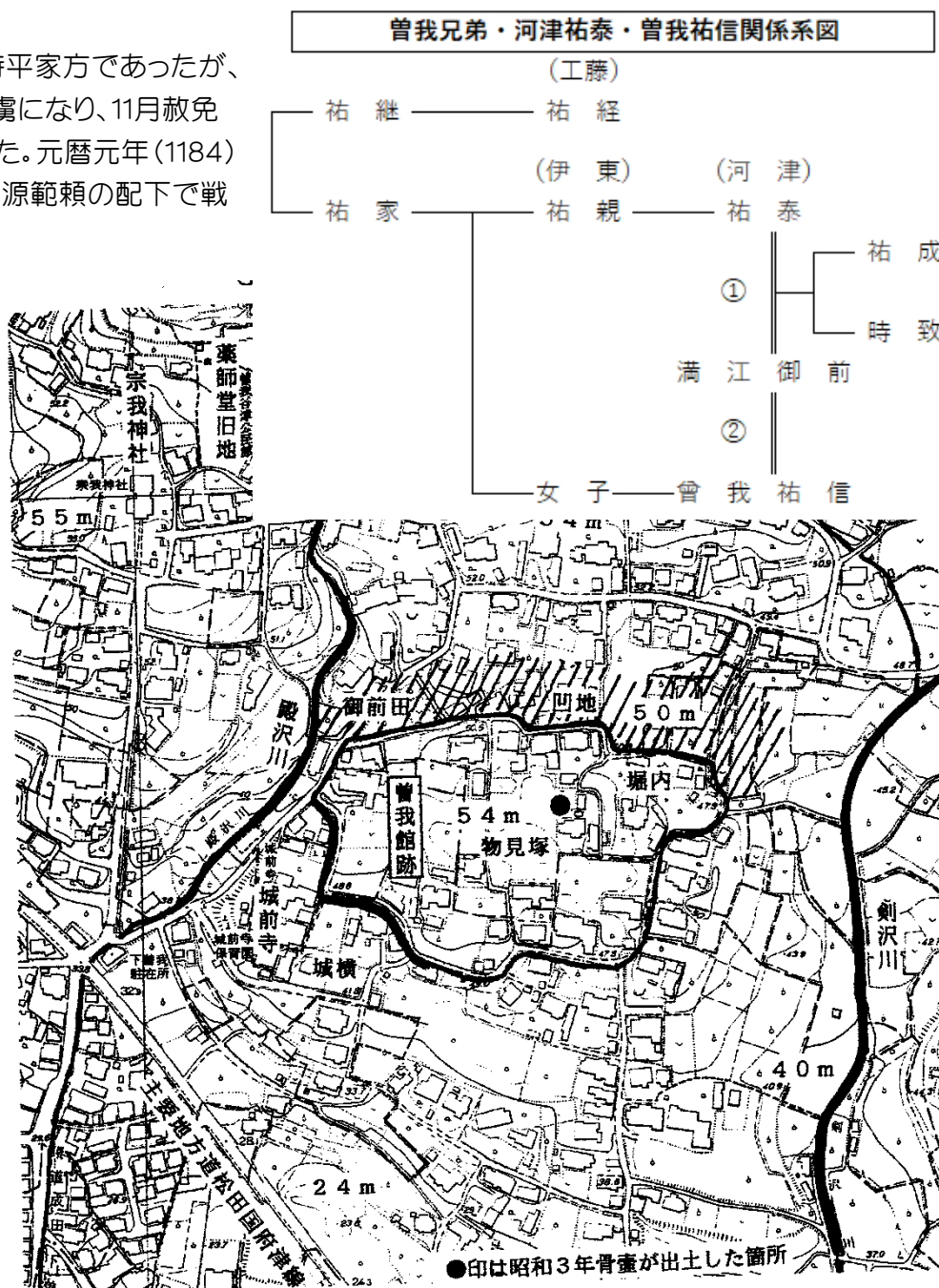


図4 下曾我の曾我氏館跡付近図(〇〇mは海拔を示す)

建久4年(1193)頼朝は将軍に就任した翌年の4月、富士山麓で盛大な巻狩を催した。その機会を利用して曾我十郎祐成と曾我五郎時致は、工藤祐経を殺して、父の仇討を果たした。世に工藤祐経は悪者にされているが、もとをたゞせば伊東祐親が工藤祐経の領地を奪ったのが原因であるから、祐親が悪いのである。

厚木の毛利荘は源義家が立荘した源氏荘園でその支配には義家の子義隆が当たった。しかし義隆が平治の乱で討ち死にすると藤原姓の毛利景行の支配するところとなった。頼朝の挙兵時、石橋山の合戦で平家方に毛利景行の名が見える。しかしまもなく降伏して毛利荘は頼朝の関東御領(荘園)になった。その荘官には公文所(政所)別当で都から来た公家の大江広元に宛て行われた。彼は頼朝の死後「鎌倉殿の十三人」の一人となった人物で、毛利の荘を息子の季光(すえみつ)に譲った。譲られた息子の季光は「毛利」を名乗った。その子孫から、安芸国の戦国大名毛利元就が出てくる。

図6 相模国毛利庄の位置

結 び

- 石橋山の合戦で見ると、中村一族や三浦一族など源氏側は国衛系武士が多く、平家側には大庭景親や山内首藤経俊など荘園経営者が多く、両者の対立が想定される。
- 同じく、源氏側武士団には沿海側武士団が多く、平家側は波多野氏や糟屋(谷)氏など山側ないし海老名氏など内陸側武士団が多い。それは東海道の隣接したり、海上物資の流通に関係した武士

団は情報に早く接する関係で革新的武士団が多い。一方山側の武士団は情報の入手が遅く、体制側の武士団となり保守的であった。そのため時勢を見誤ったのである。

○平安末期から鎌倉幕府成立期の社会を、文化的な公家社会と人殺しを生業とする野蛮な武士社会との対立という図式は時代遅れである。実際には東国武士といえども滝口武士や北面の武士として都の生活を体験している者もいるし、特に平家政権が都の治安維持のため設けた京都大番役には、東国から多くの武士が動員されているので、京都文化に接しそれを摂取した武士も多かったと思われる。

○鎌倉幕府ができてすぐ、朝廷を中心とする公家政権は凋落し、**武士の世の中**になったとする見方は短絡的である。頼朝は天皇制を否定しなかった、というよりその権威を利用して自分に敵対する武士勢力を朝敵として倒すことによって己が勢力を伸張させ、天皇から下賜される**官位の推薦権**を頼朝が独占することによって、武士社会の秩序を形成しようとしたのである。

それに違反した(あるいは頼朝の意図が分からなかった)武士たちが、後白河法皇から直接に官位を授けられた結果、頼朝から罰せられたのが**源義経**や御家人たちである。頼朝はたとえ弟とはいえどもそれを許さなかったことに、「**官位推薦の独占権**」の意義の大きさが分かるのである。

最近の学説では鎌倉時代を、皇室・公家・寺院・神社・将軍(鎌倉幕府)の**権門体制**とする見方が広がっているのは、皇室を中心とする**朝廷勢力を過小評価**してはならないことの証左である。

《引用参考文献》

- ・「神奈川県史」通史編第1巻 発行神奈川県
- ・「神奈川県史」資料編第1巻 発行神奈川県
- ・「相模武士」㊟鎌倉党(大庭一族) 湯山 学 戎光祥出版
- ・「同 上」㊟三浦党 湯山 学 戎光祥出版
- ・「同 上」㊟中村党・波多野党 湯山学 戎光祥出版
- ・「同 上」㊟海老名党・山内首藤氏 湯山 学 戎光祥出版
- ・「同 上」㊟糟屋党・渋谷党 湯山 学 戎光祥出版
- ・「相模のもののふたち」 永井路子 有隣新書
- ・「神奈川県史の歴史散歩」上・下巻 神奈川県高等学校歴史分科会 山川出版社
- ・「全譯吾妻鏡」第一巻 永原慶二他 新人物往来社
- ・現代語訳「吾妻鏡」第1巻 五味文彦他 吉川弘文館
- ・「頼朝の武士団」 細川重男 朝日選書
- ・「頼朝の精神史」 山本幸司 講談社選書
- ・「大庭御厨に生きる人々」 伊藤一美 藤沢市文書館
- ・「波多野氏と波多野庄」 湯山 学 夢工房
- ・「実朝と波多野」 秦野郷土文化会 夢工房
- ・「鎌倉御家人の系譜」――山内首藤氏の周辺―― 山内利三 爽風社
- ・「毛利一族の源流」 露木國寛 神奈川新聞社
- ・「鹿児島県の歴史」 原口虎雄 山川出版社